

追 想

—映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見て—

松浦 周之助

「この子は日本人の子供だ」と偶々出会った中国人から呼びかけられた。1946年、北満でも朝から暑い朝、私は中国人の農家に使われ、牛や馬7頭を引き連れて、約5キロ離れた放牧場まで片目の馬に乗りながら、主人の中国人と一緒に毎日のように行く途中でした。

その前年3月現役兵として、ソ満国境ハンカ湖近くの「楊崗」の独立中隊に入隊し、ちょうど一期の検閲（初年兵のテスト）が終わり、幹部候補生の試験結果の発表を転属した密山の部隊で待っていた時でした。8月9日ソ連軍を避けて山中を逃避する時でした。

途中、当時の「勃利・弥栄」という満蒙開拓団発祥の地と云われる街を通り過ぎましたが、野犬が彷徨しており、人の姿には全く会えませんでした。

途中で出会う避難する開拓団の人は皆、殆ど老人女子と子供ばかりで私たち、兵隊を見ると同行すべく暫くはついてきましたが、どうしても遅れ、結局離ればなれとなるばかりでした。

演習の際、偶々広島県から来た開拓団の方の土作りの家を訪れたことがありますが、それは見かねるような粗末なもので、満蒙開拓という美名に隠された、棄民政策の犠牲と言ってよいようなものに見えました。

今回「満蒙開拓団」の映画を見る機会があり、当時を偲び、今なお中国、特に東北地区一帯からの未帰還の方々のことを思えば、ただ戦争はすべきではないと言うのみでは、済まされず、幸い生を受けて日本に帰ることができた者として、当時のことを思い出し、広く喧伝する一助になればと思い、思いつくままに筆をとりました、まだまだ言い尽くせませんが、こんなことは、国の施策であっても二度とあってはならないと思います。

（まつうら・しゅうのすけ：松江市在住。昭和18年旧制中学を卒業。就職のため渡満後、入隊。密山で敗戦、ソ連軍の捕虜になるなど辛酸をなめたが、21年10月、広島県大竹港に上陸復員後、当時疎開していた郷里の松江市の肉親のもとに帰る）